

全国中学校社会科研究大会 大阪大会【地理的分野】 研修報告

令和7年12月11日(木)

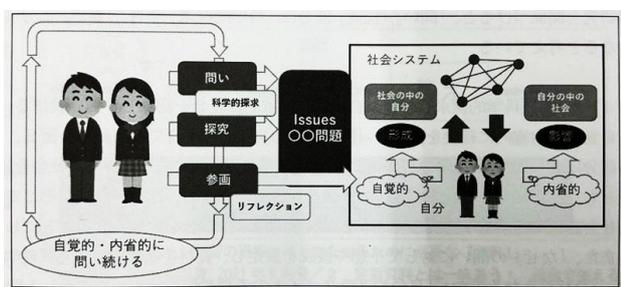
地理的分野専門委員長 笠松中 山田 雅史・副分野長 陽南中 北島 裕也

1 地理的分野の研究についての概要

自覚的・内省的に社会を認識し

「問い続ける」子どもを育てる地理の授業
～「科学的探究」と「リフレクション」を通じて～

研究主題に基づいて、地理的分野においても「問い」を立て、「探求」する授業を展開することで、「社会参画」できることを目指す研究が推進されていた。「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子どもを育てる地理の授業」として、以下のモデル図を基に、2つの授業展開での主張であった。



【自覚的・内省的に社会を認識し「問い続ける」子どもを育てる授業】紀要より

一つ目は、自覚的に社会を認識する子どもを育てる地理の授業【授業実践Ⅰ】、二つ目は内省的に社会を認識する子どもを育てる地理の授業【授業実践Ⅱ】である。

2 授業の概要

どちらも、実際の授業の公開ではなく、事前に授業を録画し、編集された動画を視聴した。実際の生徒の様子が分かりづらいというデメリットがある一方、単元においてどのような単元の学びがあったのか（前時までの授業の様子）、研究の視点として生徒のどんな姿を見ればよいのかが編集された結果、明確となっているというメリットも感じた。

【授業実践Ⅰ】

「アフリカ州」

大阪市立大桐中学校 小谷 彩花教諭

学びにおける「問い」を7種に分類し、単元を通して、または一単位時間ごとにそれらの問いを意図的に生徒に問いかけることで、生徒の認識獲得を目指していた。本実践では、アフリカ州を「アフリカが貧しいのは誰のせい？」という問いを中心に構成し、単元で身に付けた社会認識（アフリカの経済構造）から、自身も社会形成に関わっていることを自覚し、社会の中にある自分に気付くことをねらいとしていた。一単位時間の学びには、「一枚ポートフォリオ」にそれらの問いを記し、記入することで一単位時間の学びを集約していた。

【授業実践Ⅱ】

「関東地方」

堺市立宮山台中学校 久井 健史教諭

内省的に社会を認識する子どもを育てる地理の授業として、新たな社会認識によって既存の自己の社会認識を内省し、自分の中にある社会に気づく子どもを育てる授業として提案された授業であった。「なぜ東京にヒト・モノ・サービスが集まるのだろうか～東京のイメージは？～」という問いを中心に単元を構成し、東京の一極集中について考える単元の終盤の授業では、一極集中を是正するべきかについて考え、東京のイメージの変容をねらっていた。さらに、地理学習の最後に生徒たちが生活している近畿地方を学習し、大阪の「副首都ビジョン」について考える学習も位置付けていた。

3 大阪大会からの学び

社会的な見方・考え方を働かせるためにも、問いの重要性であるとされている。視点を活かし、思考させる問いとはどのようなものがあるのかを、地理的分野の授業研究委員でも明らかにしているところである。そういった意味で、問いを中心に単元を構成し、働かせる見方・考え方を明確にした上で生徒の認識獲得を目指す営みは学びがあった。

一方で、大阪大会の実践は、それらの問いを生み出す主体が教師である場面が多くあるように感じた。さらに、「一枚ポートフォリオ」にはおおよそ10ほどの問いがあらかじめ記されており、問いを繋ぐというよりは、一問一答の連続で、教師の獲得させたい認識に近づけていくようにも見受けられた。次の問いに向かうのは、プリントに記されているからではなく、生徒の思考が連続するからである。一問一答形式ではなく、生徒の思考をコーディネートしていこうとするこれまでの岐中社の実践の素晴らしさを感じた。また、視点を活かし、思考させる問いをいかに生徒に抱かせるかという授業の構成は、事実に関する認識を獲得する授業での課題化と通ずるものであり、生徒主体の学びを生み出すことはこれからも大切にしていきたい。

社会の参画するということは、価値に関する認識を形成する授業とも関わりが深いと感じた。実践Ⅰ授業では、社会と自分自身の関係性に気づかせる「アフリカが貧しいのは誰のせいか」という問いを大切にしていた。確かに、日本に住む大阪の子どもたちにとって「私たちのせいかもしれない」という認識に至らせるためにはある程度有効であるかもしれないが、意図性がありすぎるとも感じた。社会形成に関わるために、社会の中にある自分に気づくことは、岐中社の事実に関する認識を獲得することでも可能であると考えた。